

が見出された。完全な自己制御を理想とする強迫性格者にとって、自己制御の喪失はそれが一時的にせよ自己の存在を脅かすものとなる。このため上記の様な状況で、二次的な防衛として離人症状が用いられる。即ち自己制御不可能な自生的思考、感情が働く自己と、それを観察する自己との分裂が起こり、自他を含む人間が単に刺激に反射的に反応する「物」でしかない形骸化した事物として感じられてしまい、またこれにより自己制御の喪失という脅威が一時的に回避されると考えられた。

離人症状の消失、即ち発作という症状形式をとる点に関しても患者の自己制御の側面から理解し得る。発作時、患者は離人感から気をそらそうと他のことに注意、思考を集中させ、かつ感情反応を意識的に抑制することに努める。これは二次的な防衛機制の中で、意識的な思考、感情の制御を回復しようとする試みであり、この試みがうまくゆけば自己制御可能という安定感が生じ、二次的防衛である離人症状は不要となり消失すると考えた。

7. 思春期女子にみられた抑うつ代理症状としての盗癖

青 山 雅 子 (新潟県コロニーに
いがた白岩の里)
橘 玲 子 (新潟大学保健管理
センター)

我々は、盗みで当科外来を受診した2人の思春期女子の症例を呈示した。

症例1. 高1F子。エリートで仕事中心の父と、幼少期に実父を亡くした強く厳しい母と、弟2人の5人家族である。F子は幼少期に、父の転勤により各地を転々とした。成績優秀だが友人は少なくいじめの対象であった。高校受験失敗を機に万引を行う様になり母につれられ受診した。初診時、軽度の睡眠障害があり抑うつ状態であった。又、万引きに対する罪悪感を感じられなかった。強すぎる母にかわり治療者がF子の依存対象となりF子の母に対する批判を聞き入れる事で抑うつ状態は改善し盗みも行わなくなった。

症例2. 中3M子。エリートで仕事中心の父と、症例1と同様に幼少期に父を亡くした強く厳しい母と弟1人の4人家族である。M子も数回転校している。M子はN市になじめず父の転勤を待ち望んでいたが、父の転勤は中止となり失望した。母もN市安住について父方祖母との争いがあり、M子の気持ちを察する余裕はなかった。そのため、元来弟に比べ親子関係は希薄であったが、一層家人と距離ができた様であった。その後、M子は母の財布から盗みを続けていた。母につれられ

当科受診したが、抑うつ状態で言語交流が困難であった。その為、箱庭療法を行った。治療者へのM子の依存、母親治療者への母の依存が充たされると、M子の抑うつ状態、アパシーは改善され、言語交流も可能となり治療終了となった。

2症例の共通点は、思春期に発症し、支配的で社会規範を重んじる厳格な母をもち、父とは関係が希薄な事であり、又、初診時、抑うつ状態で睡眠障害、摂食障害、アパシーが目立ち、盗みに対しての罪責感を感じていない点であった。F子は受験失敗により両親から見放され、M子は転居中止により失望し、さらに家庭不和から母のM子への関心が薄らいだ。この事が本例患者に喪失体験となり、抑うつ状態に至ったと解釈される。時を同じくして出現した罪責感を伴わない盗みは、抑うつ代理症として位置づけられるのではないかと考察した。

8. 抗てんかん薬のモニタリング —フェノバルビタール蛋白結合におよ ぼす α 1-AGの影響 第II報—

阿部 雅典・三宅 章 崇 (田 宮 病 院)
斉藤 健利・田宮 崇

抗てんかん薬の血中濃度におよぼす急性相反応物質の影響についての知見は、第I報で報告したが、その中では、蛋白結合率と急性相反応物質に負の相関関係があり、薬物の蛋白結合に阻害的な作用があることを認めた。

今回我々は、各種の急性相反応物質のいずれが、フェノバルビタールの蛋白結合に影響をおよぼしているのかを検討したので報告する。

一連の実験によって、 α 1-AGが、フェノバルビタールの蛋白結合率に影響をおよぼすことが判明した。そして、 α 1-AG濃度が、100mg/dl相当の増減により、酸性物質であるフェノバルビタールの蛋白結合率は、約12%の変化であり、負の相関関係であった。

薬理作用の有するものは、蛋白非結合型、即ち遊離型薬物と考えられており、 α 1-AGが増加する炎症疾患においては、全薬物濃度が、治療有効濃度範囲内であっても、遊離型薬物濃度が増加するために薬物の中毒・副作用の発現が考えられる。

特に蛋白結合率の高い抗てんかん薬は、フェノバルビタールよりもさらに α 1-AGの影響を受けやすいと考える。

従って、抗てんかん薬は、全薬物濃度を測定しているのが一般的であるが、炎症性疾患時には、 α 1-AGあるいは α 1-AGと相関関係の高いシアル酸やC-反応